公園事業のステークホルダー
—自治体の関わり方とは

［取材協力者］
永山 悟 氏　正会員　陸前高田市 建設部都市計画課 課長補佐兼計画係長

「温近知新」とは「温故知新」にヒントを得て、最近の実例から学生目線で将来を展望する企画である。本企画では、2022年3月末に全ての整備事業を終えた高田松原津波復興祈念公園[注1]（以下、復興祈念公園）を対象として、プロジェクトに深く携わった方々に3回連載でインタビューし、各者が抱いている土木的視点やプロジェクトに対する考え方の共通点・違いを明らかにする。今回は永山悟氏に市職員の立場のお話を伺った。永山氏には陸前高田市での現地視察の際にもお力添えいただいた。

（2022年7月19日（火）オンライン会議システムにて）

市と復興祈念公園の関わり

市は、市民に愛されていた高田松原の再生への願いも込め、震災復興計画に「防災メモリアル公園」を位置付け、その後国営公園を誘致する活動を行いました。民間主導による「国営防災メモリアル公園を陸前高田市に誘致する会」とともに署名活動などを行い、結果として国営追悼・祈念施設が祈念公園の中に設置されることになりました。また、祈念公園の基本理念にも掲げられている「奇跡の一本松」の保存事業を行ったことも市の重要な取り組みでした。

祈念公園は関係主体が多く、公園内の施設の管轄も細分化されています。そのため国・県・市によって綿密な調整が行われたのが特徴です。例えば**写真1**右手の県管轄の東日本大震災津波伝承館と左手の市管轄の道の駅高田松原の上に架かる国管轄の大きな屋根の設置が挙げられます。施設ごとに管轄や予算規模が異なりましたが、有識者会議では「管轄は異なっても利用者にとっては連続する空間なのでデザインは一体的に」という考えが大切にされていました。有識者会議でデザインの方針が決まり、それを実現させるという気持ちを皆で共有したからこそ、行政間の調整がうまくいったと考えています。

復興祈念公園と共に暮らす

現在復興祈念公園では、市民の日常的な散歩や夏季の海水浴利用に加え、観光物産協会などの「パークガイド」による公園や震災遺構の案内、地元NPOによる松原の維持管理なども行われています。

一方、震災後、市街地は山側にシフトし、祈念公園との距離が遠くなったため、市民や来街者の利用の促進が課題です。

写真1　国・県・市の調整が行われた施設（撮影：学生編集委員）

永山 悟 氏
NAGAYAMA Satoru

1984年宮崎市生まれ。東京大学大学院社会基盤学専攻（景観研究室）修了後、アトリエ74建築都市計画研究所を経て、震災を機に陸前高田市に移住。2012年市嘱託職員、2013年から正職員、2019年より現職。

例えば岩手県が進める市民協働の活動の一環では、市民目線でおすすめの場所をＰＲする地図を作成しています。復興祈念公園はこれから10年、１００年と続く場所なので、そうした活動を含め焦らず取り組んでいくことが大切だと考えています。

私たちの温「近」知新

本連載はさまざまな分野の方が携わっているプロジェクトに対し、複数のステークホルダーに取材を行うことで、建築や造園のような土木に近い他分野、そして土木に従事している方の事業への携わり方、大切にしていることや市民との関わり方の違いを理解したいという思いから始まりました。2月号は建築の立場より内藤廣氏、3月号は造園の立場より酒井学氏、本号は市職員の立場より永山悟氏にお話を伺いました。連載を経て、皆で振り返りました。

連載に取り組む前に考えていた土木と他分野の違い

植野――土木は社会資本、建築は商業施設のような人でにぎわう場所の整備に携わるイメージを持っていたため、土木は相対的に堅く、建築は相対的に柔らかい印象がありました。

松永――就職後も大学の学部・学科のように、分野ごと樹形図状に分かれた業務を進めていると思っていました。他分野出身の個人同士が交わりあって事業を進めているイメージはありませんでした。

現在考える土木と他分野との違い

宮田――土木の良さは、まちという広範囲を対象にする視野の広さと、バトンリレーのように引き継がれる複数の事業を長期間のまちづくりとして見通す視野の広さを兼ね備えていることだと思いました。この中で、多くの関係者間を調整する柔軟な対応力も土木技術者ならではの素養であると感じました。

松永――内藤先生から伺ったラグビーの例えが一番腑に落ちました。土木も他分野もラグビー選手のポジションのようにそれぞれ特長や役割があると思います。一方で、立場・役割が違ってもゴールの方向を向いていることは共通していて、さらにたどり着き方も、ある程度は共通認識を持つ必要があると思います。

連載で得た気付き

橋本――事業の段階ごとに各分野が活躍するのではなく、全段階で関係者全員が関わっていると知りました。同じ目標に向かって全員で力を合わせることが、事業の成功には必要不可欠だと感じます。

宮田――大学では専門分野に分かれて学びますが、「地域に貢献する」という目標は共通していることにはっと気付きました。分野によらない共通の目標像があると思えば、専門分野外だからと考えられずにいた物事にも、挑戦してみることが重要だと思いました。

取材中に特に心に残った言葉

橋本――全員がおっしゃっていた「分野の違いよりも同じ思いや目標を持つことが大切」という言葉です。復興祈念公園の事業は皆さんが同じ思いで取り組んでいたということを実感させられる言葉でした。

植野――内藤先生の「自分たちが地域に行える手助けとは人々の想像力の幅を広げる取り組みを行うことだ」という言葉です。「人々」には影響力の大きい住民だけでなく、全住民、亡くなった方や未来の子どもも含まれると伺いました。専門家が過去や未来の多くのことを想像できて初めて、住民の事業への興味や関わりは大きくなると思い、広い視野で物事を捉える重要性を学びました。

（注１）東日本大震災の犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の後世への伝承とともに、国内外に向けた復興に対する強い意志の発信のため整備された公園。（一財）公園財団（２０２２）高田松原津波復興祈念公園 国営追悼・祈念施設（https://takatamatsubara-park.com/（参照：２０２２年９月21日））

（学生編集委員：植野弘子、橋本美月、松永葵、宮田比奈）